

喝采

有森信二

原田ジョーさんが死んだ。朝一番に、東山から電話が入った。昨日までは普通に勤務し、プロジェクトの当初の課題である「仮設プレハブ棟の建築」のことで、膝詰めの意見交換をしたのだそうだ。ジョーさんは、プロジェクトの事務責任者であり、東山は本社開発部の部長であったから、白熱したやり取りを二時間ほどしたという。

今日は詰めの話をする予定だったと東山は言い、「昨日、ジョーさんらしいジョークを聞きながら、熱っぽく二か月先のことや、プレハブが竣工する半年先のことまで話し合っただが」と、東山らしくない狼狽えた口調だった。

もともとは、ジョーさんが三月までこの本社開発部の部長であり、東山は経理部の次長であった。ジョーさんが定年で退職した後、東山がジョーさんのポストに座り、ジョーさんは、定年退職後も請われて、課長待遇の身であるプロジェクトの責任者に再雇用されたということになる。

つまりジョーさんは、かつて直属の部下であったこと

ある東山の下で、臨時に設けられたプロジェクトの事務責任者として、囑託の身分で仕えることになったのだった。

若い頃から心臓にペースメーカーを入れていたジョーさんは、定年とともに完全に職を辞すつもりでいたのを、余人をもつて替え難い、是非に、と頼まれ引き受けたらしい。「プロジェクトは、開発部の組織とは離れたものだから、ジョーさん個人に全ての事務の責任がのし掛かる。それは定年前の比ではない。俺が一年早く人事権を持っていたら、頼みはしなかった」東山は常々そう言っていた。

今朝、ジョーさんが起きてこないのを不審に思った奥さんが布団を覗いてみたら、既に冷たくなっていたという。

「昨日別れ際に、ジョーさんが手を伸ばして来て、互いに頑張ろうや、と力強く握手したんだ」東山はジョーさんの手の温もりが忘れられないと言い、電話を切った。

ジョーさんは、原田壤一というのが本名だ。俳優の宍戸錠に風貌が似ており、キザで照れ屋でもあったから、「ジョーさん」が通称になったらしい。

東山と僕は同学年、ジョーさんは四歳上だった。高卒の僕たちは独身寮「木槿荘」の仲間であったが、ジョーさんは第一期入寮で、寮長であり、いわば番長であった。

入寮すると寮長に挨拶しなければならぬということで、東山と僕と、田舎から来た中田の三人が部屋をノックした。

「三日も経ってるじゃねえか」

ジョーさんは、宍戸錠の口調でいきなり一喝した。僕たちは首を竦めた。やばいぞ、と手に脂汗をかいた。三人で管理人の花村さんに挨拶に向いたから、挨拶は済んだと思っていた。つまり、寮長が誰かを知らなかったのだ。

「田舎もんばっかで、エライスマンヘン」殆どものを言うのを聞いたことがない中田が、いきなり土下座したのだ。

東山も僕も、遅れまいと中田に習った。

「アホンダラ、面を上げる。下手な芝居はいらん。こせこせした奴は性に合わない。俺は口も手も早い。それだけや」

ジョーさんは、何故、何、と理屈を言う奴、オベツカを使う奴が嫌いなのだ、というのが寮内での評判だった。

入寮して半年が過ぎた頃、同室の中田の様子が変だ、と東山が僕のドアを叩いた。夕飯から帰って来たと思つたら洗面器にゲロを吐き、下腹を押さえて呻いているという。

「盲腸だ」中田は今まで薬で散らして来たのだと言った。

「だったら、外科だ。どこかの救急に駆け込まないと」

ジョーさんに報告しなきやと、東山が寮長室を覗くと、炬燵で居眠りをしていたジョーさんが跳ね起き、「ヨッシや、行くぞ」と即断即決をした。市内の救急外科まで行くと言う。夜の十時を過ぎていたが、管理人の花村さんの軽自動車を借り、「出発だ」と宍戸錠の声で言った。

片道四十分を走り、すぐに手術となった中田が病室に戻って来たのが一時間後で、時間は零時を回っていた。

「こんなときやあ、ヤバイんだ。安全運転第一だぞ」

小雨の落ち出した交差点で、ジョーさんは見栄を切り、助手席の東山の前に、膨らんだ頬を大きく捻った。「アクセルとブレーキを踏み違えたりしてな」と冗談を言った瞬間、時速十キロほどに減速した車体が、信号で止まっている車にゆるゆると突っ込んで行った。

バンパーに小さな凹みの出来た車の持ち主は、質の悪い相手だったらしく、ジョーさんは外車であるその車を買換えざるを得ず、借りていた花村さんの軽自動車も買い換えて戻すことになったらしい。

相手との折衝、賠償、入院見舞い、お詫び行脚と、一年以上の時間と金を使わざるを得なかったと噂には聞いたが、東山と僕が少額の見舞金を包んだときにも、「心配するな、お前ら」と頑として受け取らなかった。

一週間して退院してきた中田は、事故のことを知らない。木槿荘仲間の出世頭となった中田には、ジョーさん定年後の今も知らされていない筈だ。

「田舎のお袋を喜ばせろよ」

八年前の中田の昇進パーティーでのジョーさんの挨拶は、ぶつきらぼうなものだったが、東山も、僕も「ジョーさん、渋く決めたな」と喝采したものだった。